公共交通機関の「死」

隠蔽を生んだ根本原因

ＪＲ九州高速船が、博多と韓国・釜山を結ぶ旅客船「クイーンビートル」（定員５０２人）で浸水が発生していることを隠して３カ月以上運航を継続していたという事象は、ご存知かと思います。２月の時点で、船首部分で２～３リットルの浸水が確認され、現場からの報告を受けたにもかかわらず、会社側は国交省に報告せず、法令で義務付けられた検査や修理も行わなかったとのこと。要は、「隠蔽」です。危うく「タイタニック」のような大惨事になるところでしたが、８月に国交省の抜き打ち検査があり、その際に行われた乗務員への聞き取りで事が発覚したとのことです。これにより、社会的な信用を失ったのは間違いないのですが、その根本にあったのは、言うまでもなく、コスト削減をはじめとする会社の利益至上主義です。これは何も、船に限らず鉄道においても、その本質は同じ。ここ数年、「音がうるさい」といった乗客の軽い一言さえも真に受け、即列車を止めるといった類の安全策が定着していることからも、会社が車両のコスト節減に対して後ろめたさを覚えているのは明白です。安全安定輸送に必要な「お金」をケチれば、公共交通機関としての体を成さないのは当然です。

隠蔽が隠蔽を生む構造

「投影」という心理学上の概念があります。これは、自分が否定したい自分自身の嫌な面が、相手の姿や態度、あるいは言動を通して見えてしまうことです。お気付きのように、他者の批判や粗探しをしながらも、その内容がそっくりそのまま、その人自身にも当てはまっているというケースは珍しくありません。「お前が言うなよ」と、まるで私たち社員を目の敵にしているかのようなニュアンスを込めて釘を刺し、仕事で発生した問題に関する聞き取りにおいても、何か隠し事をしていないかと疑り、圧をかけてくることが多いですが、それこそ会社自身が隠蔽体質にあることの裏返しではないか、ということが今回のクイーンビートル事件より垣間見えます。**「他者を判断する際の基準は、自分自身にも適用されねばならない」（カント）。**社員を正す前に、まずは、不都合な事は何でも社員に丸投げするセコい企業体質を正すべきではないでしょうか。仮に、会社が何かを隠蔽していた場合、会社の指示で動く社員も、その隠蔽に加担することになるという単純な話です。

会社が現場の人員や設備への経費を大幅に削減することで、作業環境が劣悪になり、業務上のミスが起きる確率は格段に上がります。

社員の隠蔽を刑事のように暴くことよりも、ミスや隠ぺいを誘発する要因をなくす方にコスト、労力をかけるのが本筋です。

NRU

若い力

第 190 号
2024 年　９月１日
発責　国労九州本部

博多区博多駅東３丁目９番３号
ニッコーハイツ１００３号
ＮＴＴ　０９２－４８３－１５１５